



# 読売歌壇

## 小池 光選

姉五歳絵本開いて読み聞かす相手は弟生後一〇日  
市原市 宮本 允子

【評】五歳のお姉ちゃん、弟が生まれてうれしくって、うれしくってたまらない。生後百日の弟に絵本を読んでやる。文句なしに可愛らしい。赤ちゃんもきくと喜んでる。

お母ちゃんサイダー飲もう誕生日長生きしてね  
ずっただからね  
羽曳野市 大塚 郁子

【評】誕生日のお祝いが一本のサイダー。なんともつましいがそのつましいさがいい。お母ちゃん長生きしてね。きつただよ。母を思うこぼれに真実が籠もる。

読み難き名前多しいつの日かルビ打つ墓誌の  
現れるやも  
青森県 佐々木 牙美

【評】昨今の子供の名前は本当に読み難い。彼らがお墓に入るときは名前に振り仮名がいるのではないか。作者の心配、なるほどだ。

ゆらゆらと虫のごとく揺れながらスマホが一つ  
くらやみを行く  
秦野市 星 光輝

来客に扇風機の風向けてやるそれが昭和の御馳  
走だった  
狭山市 奥園 道昭

コンビ二の二六〇円ロッケパン買ったため吾は  
がんばってゆへ  
鳴門市 楠井 花乃

八月の朝  
今もつて「あんちゃん」と呼ぶ弟の声はしみじ  
み郷愁をよぶ  
市原市 岩瀬 悦子

すっぽり前から猫の顔撫む掌のまんまに濡  
れた鼻あり  
匝理市 椎名 昭雄

初もぎの桃持ち訪えば不在にて玄關ノ下  
に下り  
ひたちなか市 新山 英輔

山梨市 田村由利子

## 栗木 京子選

夏休み交代アナのさわやかな緊張伝わるニュー  
スの画面  
所沢市 杉本 葉子

【評】テレビのニュース番組。いつものアナウンサーが夏休みをとり、代わりの人が登場した。いかにも夏らしい状況である。日常の中の発見が「さわやかな緊張」から伝わる。夜の散歩パーガー求め帰る道八十路の口が待てず煩張る

【評】パーガーを買ったため出掛けたのか、散歩の途中にふっと店に寄ったのか。いずれにしても八十代の作者の若々しさが目に浮かぶ。「口が待てず」がじつに率直である。

「うわー勉強しないでいい」が挨拶を夏を染し  
み孫に帰るぬ  
白井市 野老 功

【評】宿題のことを忘れて祖父母の家では思う存分に遊べる。こうした切り替えが孫の成長には大切なのだ。挨拶の言葉が楽しい。

親友が正座しながら聞いている最新スマホの扱  
い方を  
春日部市 相沢 明子

甲子園に校歌流れる常連校母校じゃないが歌え  
る私  
仙台市 平野 洋子

空間放射線計測をして処理水放出へまだ戻れな  
い普通生活  
郡山市 寺田 秀雄

暑いこと「アツツイ」と言ふ乙女らの甲高き声  
コンビ二に消ゆ  
常総市 渡辺 守

目立たない、ネクラ、腹黒 一篇の一語それぞ  
れ訳者違えば  
埼玉県 正木 克美

アフガンの水辺で遊ぶ笑顔の子を中村哲は今も  
見てある  
高松市 島田 章平

道の辺にタカサゴユリは揺れて咲くかな風  
を秋へのしるべに  
宇土市 三浦 清美

## 俵 万智選

どの雲もくじらに見える夏があり君を家族と呼  
んでもいいか  
前橋市 ナカムラロホ

【評】くじらは家族の絆が強いと言われる。下の句の気持ちが分かるからこそ、雲がくじらに見えるのだろう。スケールの大きな、さわやかなプロポーズだ。

よく知ってから好きになるわけじゃないむしろ  
知らないから好きになる  
堺市 一條 智美

【評】「好き」という気持ちの不思議をとらえた一首。こうこうこうだから好きという理屈ではなく、なぜだか知りたいと思うときに恋の始まりなのだ。

御朱印を捺す神職はかざりて自重を掛ける出  
雲路の夏  
瑞穂市 渡部 芳郎

【評】旅のスケッチ的な一首だが「かざりて」さらに「自重を掛ける」という細やかな描写が光る。

迎え火を焚けぬ高層ビルに住み盆提灯を窓辺に  
灯す  
越谷市 藤谷 明

オムレツは卵を割らなきゃ焼けないと踏み出す  
ことの意味を知る朝  
東京都 立川 亮

自らの暮らした質を保ちつつ平和を祈る夏の終  
わりに  
松原市 たろりずむ

お互いの名前も知らぬ隣人と駐車場にて見上げ  
る花火  
東海市 中山あゆみ

曾孫よ虫を追ふ兒よわが遠き日に得し恋のすゑ  
のいのちよ  
東大和市 板坂 寿一

アンモナイトを掘り出す秋の遠足のサンドイッ  
チをはみ出すトマト  
小諸市 藤 雪陽

前籠に西瓜ひと玉住職がママチャリでゆく孟蘭  
盆の街  
吹田市 辻井 康祐

## 黒瀬 珂瀾選

きつかけは僕がおまえか引き金のように静かに  
鳴る喉仏  
相模原市 高田 祥聖

【評】喉仏とあるので、ここで詠まれたのは男性二人の景でしょう。関係性のみを切り取るスタイリッシュさに、BILDラマ・コミックに近い詩情を覚えました。これから何か情動の爆発が起こる、そんな予感を宿す一首。八月が来れば思ほゆる居酒屋で元特攻に喧嘩売られき

【評】終戦直後ではなく昭和も少し深まった頃の出来事と読みました。そんな頃でもまた戦争による心の傷を抱え、酒を飲んで荒れる人がいたのだ、というのがこの国の記憶です。

団塊の世代が頼り盆踊り浴衣の糊をビシツときかせ  
【評】仕事からリタイヤした団塊の世代が地域行事の要。糊の利いた浴衣が粋ですね。

恩なんか受けっぱなしがちょうどいいゆうわけ  
空の父がつぎやく  
垂水市 岩元 秀人

「四年振り」「四年越し」など文字並びゆっく  
り減りゆくコロナの話  
桐生市 高橋ゆみ子

衣料品、雑貨、小物を売る店のもう売ってない  
手指消毒液  
滝沢市 小田佐枝子

朝の蟬さんさん鳴けよ昼からは台風余波の雨に  
なることよ  
結城市 古山 勝夫

あじさいの日に焼かれたる厚き葉に水やりすれ  
ば硬く弾きぬ  
松江市 犬山 純子

外に出すいのち護れと言ふ書と野菜の生命案じ  
あるなり  
綾部市 松下一三夫

開塾を中止し立ち寄る山寺に玉音聴きし日は  
忘れず  
新潟市 渋谷まこと

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。  
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、  
〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから。右の影絵はきのこ

次回は12日(火)  
掲載予定